

～新渡戸記念の～

『言葉の院外処方箋』

新渡戸稲造記念センター 長 樋野興夫

第16回『「はしるべき行程」と「見据える勇氣」

～ブレない人物の訓練～』

今週の定例の「音読会 ～武士道 新渡戸稲造～」は、第4章「勇・敢為堅忍の精神」である。最近、「コロナショックから、私たちは何を学ぶべきだと先生は思われますか？」の取材、質問を受けることが多くなった。私は、「曖昧なことは、曖昧に答えるのが科学的である」、さらに「環境発がん」の問題例（アスベスト・中皮腫 etc）を示し、「真の発がん研究者」の基本精神は、「先楽後憂ではなく、先憂後楽であるべき」と、しかし、「過度な自粛ムード vs 軽度な自粛ムード」の違い。勝海舟(1823-1899)の、最悪を考えて、準備しながら、『世間の騒擾に一喜一憂せず「綽々たる余裕」』で「過度な不安」の風貌を示さず最善を尽くした胆力！これが、「真のリーダーですね！」、「純度の高い専門性と社会的包容力」、「大切なことは、「常識的」に行動する』とさりげなく答えている。

私は、「日本国のあるべき姿」として『日本肝臓論』を展開している。日本国＝肝臓という「再生」論に、行き詰まりの日本を打開する具体的なイメージが獲得されよう。人間の身体と臓器、組織、細胞の役割分担とお互いの非連続性の中の連続性、そして、傷害時における全体的な「いたわり」の理解は、世界、国家、民族、人間の在り方への深い洞察へと誘うのであろう。（1）賢明な寛容さ（the wise patience）（2）行動より大切な静思（contemplation beyond action）（3）実例と実行（example and own action）の実践である。すべての始まりは「人材」であり、行動への意識の根源と原動力をもち、「はしるべき行程」と「見据える勇氣」である。

いつもと変わらずブレない人物の訓練こそが、まさに「コロナ時代」の実践であると考えている。『あなたはそこにいるだけで価値ある存在』である。三角形の法則でもあろう（次ページ参照）。



三角形の「重心・内心・外心」

信じる心 : 重心
(空っぽの器)

自分を見つめる心 : 内心
(内側を支える)

他者を見つめる心 : 外心
(外側を支える)

樋野興夫